第6回
AI倫理会議報告書

主催：清泉女学院AI倫理会議実行委員会
会場：オンライン開催
実施日：2023年3月31日(金)
参加校：麗澤高等学校、洗足学園中学高等学校

▶目次

1.はじめに
2.タイムスケジュール・プログラム
3.講演内容
4.会議内容
5.アンケート結果(講演・会議の感想)
6.委員・顧問の感想
7.資料：ポスター
8.内閣府訪問 座談会の内容

▶はじめに

インターネットが普及し多くの情報が錯綜する今日の社会で、私達は新しい技術や情報に翻弄されています。その中でもAIは特に発展が著しく、また正確な情報を見分けることがより難しくなっています。しかし、これからの社会にはAIの力なしでは語ることができない世の中になると考えられており、現在も着々と多くの技能がAIに引き継がれています。

そのような社会の中で、未来を担いAIと共に生きていくであろう私達が集い、AIについて講義を受けて学び、意見を交わす機会を得られたことに多くの喜びを感じます。

ここでの知見を自分の学びの糧として、未来に繋げることができるよう私達は日々精進し続けたいと思います。

第6回AI倫理会議実行委員長　高３ 山本明香里

▶タイムスケジュール・プログラム　3月31日(金)

10:00　開会
10:10～11:10　特別講演「富士通が取り組むAI倫理」
　　講師　久保田 千晴 氏
お昼休憩
13:00～14:30　ディスカッション
14:30～15:00　話し合い結果の共有
15:00頃　終了

〈ご講演者〉
◆久保田 千晴 氏
富士通株式会社AI倫理ガバナンス担当

▶講演内容(久保田千晴氏によるご講演)

◉AIがもたらす倫理的課題とAI倫理

☆身近なAIの例

・スマホの顔認証
・翻訳アプリ
・配達予測
・動画のリコメンド
・体操競技の採点システム
・バーチャルリメイク

☆AIの倫理的課題がなぜ話題になるのか

AIは、学習の元データに含まれていたバイアス(偏り)を引き継いだり、助長したり、AIが判断した根拠を客観的に示すことができないブラックボックス化(元データが分からない現象)が起こってしまう可能性がある。これにより、予期せぬ不都合な結果を招く可能性が高まる。

［不都合な事態が発生した例］

・人事採用システム
今まで男性を多く採用していたデータから学習し、応募者に女性と書いてあるだけで評価が下げられた。
・画像認識アプリ
AIがアップロードされた写真に自動でタグをつける機能において、アフリカ系を「ゴリラ」などとタグ付けした。
・チャットボット
一部のユーザーにヘイト発言を教え込まれ、差別用語を連発するようになった。
・職業情報サイト：就活生の内定辞退率をスコア化し、企業に提供してしまった。

☆欧米におけるAI規制

現在、ヨーロッパでは法律化も進んでいる(欧州AI法案)。医療機器、教育、雇用、重要インフラなどでは特に規制を厳しくしており、罰則規定もある。これらの規制は、ヨーロッパ外からAIを提供する場合も対象になりうる。

また、アメリカのニューヨーク市では学校でのAIの利用を禁止している。

◉生成AI

簡単な指示を与えるだけで画像や音楽・文章などの新たなコンテンツを作り出すAIである。生成能力は人間が行う知的活動と区別が付かないレベルに達しており、誰でも簡単にコンテンツを生成できる。だが、AIは「常識」を理解しているわけで

はないので、例えば「鮭の遡上」という画像を生成するよう指示を出すと、「鮭の刺し身が川を上っている」画像が生成されることがある。

☆ChatGPT
　ChatGPTとは、大規模汎用型自然言語モデルのことで、対話形式で文章を生成し回答する。簡単な質問文を入力するともっともらしい回答をくれるが、これを用いて論文を書いたりするのを禁止している教育機関もある一方、学習時に使用しているところもある。

［ChatGPTの活用例］
ディベート形式での議論：ChatGPTであれば、賛成・反対両方の意見を出すことができる。
プログラミング：じゃんけんなど簡単なゲームをする程度のアプリであれば、ChatGPTがプログラムすることができる。

☆生成AIの問題点
1.出力結果の公平性・正確性
　生成AIの元となる学習データに偏りや誤った情報が含まれると、生成されたコンテンツにもそれらが反映されるおそれがある。さらに、ユーザーがChatGPTの回答を鵜呑みにしてしまう可能性がある(例として、ChatGPTが清泉女学院の校歌をでたらめに生成したが、これを初めて見る人は実際の校歌だと勘違いするはずである)。

2.悪用のリスク
　生成AIが悪意を持って利活用された場合、虚偽あるいは有害なAI生成物が拡散され、社会や政治経済に甚大な被害を及ぼすおそれがある(フェイク画像など)。

3.情報漏洩のリスク
　ユーザーが入力した情報を学習データやアウトプットに利用することがあることから、ユーザーが秘密情報や個人情報を入力した場合、情報が漏洩する可能性がある。

4.第三者の著作権などの問題
　人が創作した著作物との区別が難しく、意図せずAIが著作物を学習に利用し、第三者の著作権を侵害する恐れがある。

◉富士通が取り組むAI倫理

☆富士通のAI倫理への取り組みの歴史

2009年～　「Human Centric」という考え方を発信
　※人を中心としたコンピュータ社会の実現を目指す考え

2013年～　「Human Centric」がコーポレートメッセージへ

2017年11月　「AI4People」の創立メンバーとして参画
　※AIの社会的インパクトを議論する欧州初の国際的なフォーラム

2019年3月13日　「富士通グループAIコミットメント」を制定

☆具体的な取り組み

・富士通グループAI倫理外部委員会

　年に2回開催している。多様な社外専門家を呼んで、客観的視点からの評価もいただいている。社長などの役員も出席し、取締役会へ報告する。AI倫理を経営の重要課題として位置づけている。

・AI倫理審査制度

　開発段階に応じたセルフチェックシステム化によってリスク状況を判定している。許容できないリスク、ハイリスク、ローリスクにレベル分けしており、それに応じて対応の濃淡を決めることを「リスクベースアプローチ」という。

人命や人権に関わるAIの開発：ハイリスク→慎重に倫理審査を通す

ケーキの焼き具合を判断するAIの開発：ローリスク
　→最低限順守すべき事柄のチェックシートで確認する

　現場の「スピーディーになるべく低コストで価値を届けたい」という思いと、ガバナンス側の「安心安全なシステムを届けたい」という両者のジレンマを解消するためにできたのが、この審査制度である。

・「人間中心のAI」推進検討会

　AIやデータの倫理に関する社内相談窓口。この相談窓口では、社内から寄せられた相談について、研究開発・ビジネス・人権・法務など社内の複数部門が多様な観点で検討し、回答している。

・社内教育

　AIに強い富士通になるための従業員の育成のため、富士通グループ全従業員が受講必須のeラーニングや、動画を使ったAI勉強会を定期的に開いている。

・AI倫理における富士通の認知度向上
　官公庁等への提言活動や、企業・学校への講演を行っている。

◉AI時代に求められる人間力
☆AIによって変化する社会（AIの発達によって期待できること）
①作業効率化・コスト削減→生産性の向上
②品質の向上→優れたコンテンツ、斬新なアイデアの創出
③ものづくりの民主化→コンテンツ生成の市場に参入するハードルが下がる

◉AI時代に大切にしてほしいこと
　社会の課題を解決し、新たな価値を作るためにAIを使うことを前提とする。
✓AIに何ができて何ができないのかを正しく理解する
✓AIがどこに活用できそうかをポジティブに考えてみる
✓感じた疑問や感情を言葉にする
✓人との繋がりやコミュニケーションを大切にする

◉質疑応答
Q.生徒だけでなく、大人もAIに対して怖いという意識がある。AIに関する誤解を解いていく、学んでいくのが大事と理解できたが、自分たちが学ぶよりも早くAIは進化してしまう。そういった中でAIを理解するために何が必要か？
A.大事なことは、社会全体が正しい倫理観でAIを活用していこうということをベースとして、AIを使用していくこと。仕事がなくなるかもといったネガティブなことだけではなく、AIによって新しい仕事が出てくる可能性もある、とポジティブなことにも目を向けて、怖がらずにまずはAIを使ってみることが理解への近道になる。

Q.AIを開発する企業として今以上にAI倫理の理解を広めるためには何が必要か？
A.国として一定の基準・ガイドラインを作るべきなど政府への働きかけが大事であるのはもちろん、AIサービスを利用する企業にAI倫理の重要性を伝えるなど、仲間づくりすることも大切。

Q.ニューヨーク市では禁止されているが、教育現場にもAIを取り入れていったほうがいいのではないか？
A. 教育の在り方が今後どうなっていくかにもよるが、宿題を代わりに解かせるといった使い方ではなく、ディベートに一参加者として参加させるなど、アイデアや発想を得るという目的でAIを使ってみるとより学びが深まると思う。

Q.富士通では、「AI倫理ガバナンス」があるということを強みにしているか？
A.AIのいい点を最大限享受するため、また企業のブランド価値を向上させるために、「AI倫理ガバナンス」をアピールしている。

Q.どのようにしてAIの規則を作ればよいのか？
A.すべてのAIに対し一律に厳しい規則を設けるのではなく、例えば人命に関わるものかどうか、というふうにリスクレベルによって規則の程度を分けることができるだろう。

Q.倫理的な立場(ある意味ストップをかける立場)として、どんどん技術を成長させていく開発側の方と対立することはあるか？
A.自分も(AI倫理ガバナンスに所属する者として)葛藤した。しかし、開発側に「もしトラブルが起きて責任問題になったとき、自分の言葉で説明できますか？」といった議論を投げかけていくことで、AI倫理の推進派を徐々に増やしていった。なぜAI倫理が必要なのかということを開発側にも知ってもらい、一緒に取り組んでいくという関係性を作るのが大切だと思う。

Q.フェイクニュースが増える上で私たちはどうすればよいのか？
A.ソースを確認したり、信頼できるメディアを頼る。悪用はなくならないということを意識して、見る側がさまざまなソースを照らし合わせて気をつけながら、メディアと付き合っていくことが大事。

Q.富士通のHPに「AI倫理を知るには」というページがある。開発側だけでなく、AIを提供する企業もAI倫理を理解することが大事、と書かれていた。現在、日本ではAIを提供する企業にはどのくらいAI倫理が浸透しているか？
A.社会ではまだまだ「AI倫理」という言葉は浸透していない。でも、もし問題が起きてしまった場合、消費者からするとAIサービスを提供した企業にも非があると考えるだろう。消費者からの声によって、AIを提供する企業の意識も高まると考える。

Q.AIによってスマホ一台でゲーム配信などを楽しむことができるようになったが、その反面、AIやゲーム・スマホに依存する人も増加しているのではないかと感じる。そして人間の自発性や知的能力の成長の阻害など、大きな問題として不安もある。AIの開発者などAIの利便性を発信する側の方々は、この問題をどのように感じているか？また、依存症と向き合うためにはどのようにしたらよいと思うか？
A.AIに責任を転嫁するためにAIを使ったり、AIの考えだけを根拠にアウトプットを行うと、「AIに使われる」人間になってしまう。自分が日々感じることや言葉を

大事にして、人間同士でコミュニケーションを積極的にとり、「AIを使いこなす・監督する」人間を目指すことが必要だと思う。

▶会議内容

◉倫理憲章

☆I班

テーマ：人間とAIが共存していくための倫理憲章を定める。

✓基本とする心

社会に参加する人間としてAIを誰もが上手く使い、そこに生じる齟齬さえも律することができるような様々な学びを求める姿勢を意識すること。

①共生

AI活用は学びを深めるための一つの手段であり、最も尊重されるべきは人間個人の意見・思考・感情である。

・AIの普及は多くの職種に影響を与える。

・AIを乗りこなして人間の強みを発揮する（＝デジタルケンタウロス）ことが大事。

②保全

公平性・透明性・安全性

・AIを社会で利用するとき明らかに不公平性が生じてはならない場面（人事採用など）がある。

・AIが何の根拠をもって私たちに情報を提示しているかわからない。

・生成AIを用いての悪用、情報漏洩、著作権侵害の可能性がある。

③医療

AIと医者が共に手術などを行い、AIを正確に間違いなく監督すること

・医療関係は慎重に判断を下す必要がある。

・「生命倫理懇談会」による「医療AIの加速度的な進展をふまえた生命倫理の問題」（3）AI規制とガイドラインでは、AIを人工知能ではなくAugmented Intelligence（拡張機能）と表現し、人間が主体的に用いて、あくまでも支援するものとして位置づけるべきとする議論が紹介されている。

④保健

カウンセリングやリハビリなど相手の感情を重視すべきところでは、AIに任せるのではなく、人間の行動・感情を尊重すべきである。

・AIが世界中の医療と医薬品の提供を改善するうえで、WHO「AIがすべての国で公共の利益のために機能することを保証するための６つの原則」によると、倫理と人権がその設計、展開、使用の中心に置かれてる必要がある。

・AIへの規制が正しく為されていない場合、患者とコミュニティの権利と利益が損なわれる可能性がある。そのため、AIを使用していく医療従事者にも正確な知識を持ってもらう必要がある。

⑤SNS

ネットリテラシーを忘れず、AIからの不確定な情報や流れてきたニュースなどに身を任せるだけでなく、自分の頭で考え、判断する力を養う。

・生成AIによって作られる画像は既に人間の知的活動と判別がつかないところにきている。大事なことはAIに悪用があることを常に意識して、様々なソースで比較することの重要性を理解する。

⑥プライバシーの保護

個人情報を法令及びガイドラインに従い、適切に扱う。

☆2班

テーマ：生成AIの使い方についての憲章を定める。

昨今騒がれている生成AIのことについての憲章を定めようと我々は考えた。生成AIの問題点として、元データの透明性が欠けていること、生成AIの生成物に偏り(バイアス)があること、生成AIを使った生成物の著作権は誰にあるのかが分からないこと、が挙げられる。生成AIを作る人、生成AIを使う人、どちらにも害のない憲章作りを心がけ、以下の４点を憲章とした。

①生成AIを使用したことを明記する。

生成AIによって作られる制作物と人間が作った制作物の差は分からなくなっている。そのため、生成AIを使ったことを明記することは重要である。

②できるだけ元データを明確化する。

③生成AIの制作物の著作権は、そのAIの利用者に帰属する。元データが存在する場合それを明確化しなければならない。

生成AIによって作られた制作物がどこから得られた情報なのかが分からないため、生成AIを作った側に対して、情報を開示することを要請する。また、生成AIを使った制作物は、生成AIを使った人に対して、生成させたいという意思があると考えられるため、著作権は生成AIの利用者に帰属する。

④AIで生成した制作物は、最終的に作成者(生身の人間)が、倫理的問題がないかどうか審査しなければならない。

AIで生成した制作物は元データが開示されてないため信憑性が低く、嘘の情報が紛れ込んでいることが多い。そのため、倫理的問題に抵触している可能性があることが考えられる。その問題を防ぐため、生身の人間が実際の文献を参考にしながら審査をする必要がある。

☆３班（教員チーム）

テーマは設けず、講演内容を踏まえてフリートークをしました。その中で出た意見をまとめると、以下の４つになります。

①AIに人格権はあるのか、AIが誤作動したときの責任はだれにあるのか。この２点を明確にする（あるいは法制化していく）ことがAIを安心して利活用するうえで必要。

②生成AIによって、誰でもクリエイティブな創作活動ができるようになる。だからこそ、今後は「AIではなく手作りで時間をかけてつくりました」という部分に価値が置かれていくのではないか。自動車で例えると、オートマチック車が一般的に普及しているが、こだわる人は操縦やメンテナンスに手間のかかるマニュアル車に乗ることに価値を置く、ということと似ている。

③人間に求められる力は、AIが正確に機能するような「的確な指示」を出せるようにする力ではないか。また、的確な指示を出せるようにするには、あらゆるものが生み出されるまでに経た経緯や技術を、浅くても良いから知る必要がある。例えば、「ゴッホ風の絵画をAIに描かせる」場合は、ゴッホの筆のタッチを学んでおかなければならない。

④生成AIを使用した場合は、従来のホームページを引用したときと同じように、出典として明記する必要がある。また同時に、どのような指示（質問）を出して得られた答えなのかを明記する。

☆全体共有で出たコメント

先生からＱ：生徒の皆さんはAIを使いたい？

参加生徒のA：勧誘ポスターだったらインパクトが必要なので、AIを使用するのも良いと思う。
例えばプレゼンテーションをする時に使用したい画像イメージを、AIに作ってもらえると便利。ただしAIが作った画像であり、あくまでもイメージ画像であることを付記する必要があると思う。

参加生徒のコメント：先日、タイで開催された模擬国連大会に参加した。かなり多くの場面で、ChatGPTで決議案を作っていたことに驚いた！海外では生成AIを使用することが普通になっているところもあるのかもしれない。

先生からＱ：皆さんは生成AIを使ったことある？

参加生徒のA：実は、ポスターの絵がそうです。（報告書p.15参照）

▶アンケート結果(講演・会議の感想)

・普段はなかなか関わることのない他校とZOOMを介してAIについて話をすることができてよかったです。自分とは違った視点からの意見やアドバイスがあり、また出された意見について議論をすることができて、自分にとって有意義な時間を過ごすことができました。

・普段の授業や生活ではなかなか聞けない富士通さんのAIについての取り組みやAIの現状について知ることができて、よりAIについての感心が深まりました。またお話を聞く中で、人間とAIが共存することによって生じる倫理的な問題をどう解決していくかということについての難しさも同時に感じました。

・初めはAIにあまり興味がなかったが、話を聞いているうちに興味が出てきた。

・今日はご講演ありがとうございました。生成AIと学校での教育との整合性はどうつけていいのかという課題意識がありました。AIを味方につけることで人間が豊かになるようにしていかなければならないなと思いますが、AIになにができてなにができないのかについては見続けないといけないなと思いました。

・AI倫理について具体例を挙げながら説明してくださったので分かりやすかったです。また、AIの仕事への影響や、AI時代に大切にしてほしいことなどの説明があったため、自分がこれから生活していく上で意識していこうと思いました。

・ディスカッションでは自分とは違ったさまざまな考えを知ることができてよかったです。

・具体的で分かりやすい講演でした。恥ずかしながら生成AIの類は、存在は知っているけど使ったことはなかったので、もうこんなところまで来ているのかと驚きました。

・どちらの班もしっかりと憲章の形になるように落とし込めていて素晴らしいと思いました。

・私たちにも分かりやすく説明してくださり、しっかりと理解することができたと思います。生成AIの話にすごく興味がわきました。私たち自身がこれからAIについてのメリット・デメリットを学び、AIによって作られた情報を正しいものかそうでないものか考えることのできる知識を養っていく必要を感じました。AIはこれからどんどん発展していくと思います。私自身はAIが人類を超える存在になることはないと考えていますが、例えばAIを開発している人や人間の感情に関する仕事をしている人、毎日毎日違うことが起こるような仕事に就いている人など

とは逆の、なにも学ぼうとせずAIがやってくれるのだから自分はいいと考えている人にはAIに超されてしまう未来がすぐそこにあるように感じました。

・同世代の方と普段は話さないようなAIについて話し合うことができてよかったです。AI倫理憲章を作るとき、それぞれの意見を聞き、ほとんどの人が「人とAIが共存するために必要なこと」を軸に考えており、AIの活用にはプラスの姿勢を示していたので、私たちの世代が大人になり、子供たちになにかを教える立場(教師など)になったAIを授業で活用するのは当たり前になるのかなと感じました。

・私たち高校生にも分かりやすく説明してくださり、とても興味深かったです。知っていたことも多かったですが、初めてバイアスの説明などをしていただいてこんなにも違う結果が出るということが分かりました。AIをただただ危険なものとして怖がりながら避けるのではなく、積極的にAIを使っていくこと、そして使いながらも注意していくべきだということが分かりました。

・まずは、本日お話しいただいたことをもとにみんなの考えを整理し、話し合いました。私たちのグループは、ChatGPTなど、使った際に使用したことを明記するようにすることや、ChatGPTを使用した場合の著作権などについて話し合いました。麗澤高校の方も一人だったのに発現をたくさんしてくれてとてもいい話し合いができ、楽しかったです。

・私はイラストを描いているので、特に生成AIのお話が興味深かったです。富士通さんという身近な企業からそのようなお話を聞くことができてとてもよかったです。

・他校の生徒とも上手く話すことができ、憲章をまとめることができたのでとても有意義な時間でした。初めは雑談などで緊張をほぐし、話し合いのときは会議の内容を参照しながら上手く進めることができました。

▶委員・顧問の感想

　日々を過ごしていて、目覚ましい発展をし続けているAIについて知ることはとても難しく感じます。ですが、AIを怖がる必要はありません。私達人間は多くの科学技術の発展とともに歩んできました。また新しい歴史が刻まれてゆくのに私達は少しずつ順応していけばいいと思います。すべてを悲観することなく、知ることこそ共生の手がかりになると思います。

　今回は委員長という大役を担わせていただきましたが、私の力だけでは絶対に成功し得ない会議だったと思います。これもひとえに支え合って頭を悩

ませながら共に話し合った同期のおかげだと思います。

私達は一人だけでは生きられません。人にはやはり人の助けが必要です。相手を慮り、困っているときは手を貸す。これこそ人間の素晴らしいところです。私はこの会議を通じてよりこのことを痛感し、またこれからも続く人生の中でこの経験を元に新しい学びを得られることを期待しています。

委員長　山本明香里

昨年の１２月頃から急速に普及した生成AIについて、AIを売る側の意見を聞けたのが良かったと感じました。また、AIと人間はどのように向き合っていけばいいかを考えるきっかけにもなりました。今回のポスターを作る際に実際に生成AIを使ってみたのですが、絵を描くのが苦手な私でも、文字を入力すれば簡単に何個も画像が生成されるのを見て、様々な本の表紙を見ているときのようで楽しいと感じました。このようにAIに対してポジティブに考えると、自ずとAIに愛着が湧くのではないかと考えます。今後も様々な場面で発達していくであろうAIについて、不安や恐れを感じる人が多いと思いますが、ぜひAIを使ってみることをおすすめします。そうすることで、自ずとAIについて知りたくなり、「AI倫理」について深く考えることができ、自分の人生がより豊かになると思います。

最初は一人で行うのかもしれなかったこの会議に仲間を誘ってよかったです。当日の会議では、至らない点が多かったと思いますが、会議に参加してくださった方々が温かく見守ってくださったおかげで、無事に終えることができました。新しい発見や、考え方に出会えた会議でした。本当にありがとうございました。

副委員長　東朱弥

ぼんやりとしか知らなかったAIと、それの使用によって生じる問題を分かりやすく説明してくださり、理解が深まりました。これからAIと共存していくためには、どのようなことを意識しなければならないか、考えさせられました。また、他校の方とのディスカッションも非常に楽しかったですし、自分たちで憲章を作成することで「こうしよう」という気持ちが湧きあがりました。

AI倫理会議委員会、名前だけ聞くと難しそうで、「こんなのが私にできるのか？」と心配でしたが、委員のみんなと協力し合い、無事終わらせることができてホッとしています。ここでの経験は、普段できないような貴重なものでした。参加してよかったです。

書記担当　外山初音

「AI倫理」の社会的な認識はまだ不十分であることを今回の講演を通して実感しました。また、今以上に理解を広めるには政府への働きかけが重要であり、そのためにAIを開発する側、提供する側、そして私たち提供される側の「AI倫理」への正しい知識が必要であること、そしてAI利用による問題を一括りで捉えず、AI自体に由来するのかそれとも私たちの使用状況によるのかを明確にすることの重要性を理解することができました。

これから必ず社会に影響を与えていくAIについて、今回のAI倫理会議を通して富士通様から直接ご講演いただけたことはとても貴重な体験でした。有難うございました。

渉外担当　木村遥

この会議後にChatGPTのニュースが次々報道され、AIの倫理規制につても様々な組織で話し合われるようになった。富士通のご講演を聴いた参加者たちは、まさにAIと倫理の最先端の取り組みに触れることができたと思う。今後もAIとどのように向き合うかを生徒たちとともに考えていきたいと思う。

倫理科　小野浩司

1年前までは、AIといえばネットで自分好みのものをオススメ表示してくれるような、「知らないうちに実は利用していたもの」だった。ところがこの1年間で、AIは私たちが自ら簡単に利用できるようになってしまった。自動車で言えば、これまで後部座席に座って目的地に向かっていたのが、運転席に座りハンドルを握って目的地に向かうような状態である。

運転は、自分の好きなルートで自由に走ることができる一方、交通事故を起こすリスクも伴う。おそらく、新たに出てきた生成AIも似たメリット・デメリットがあるように感じる。だからこそ、むやみに使用制限や禁止を強いるのではなく、自動車と同じようにルールの整備とそれを順守する社会全体の姿勢が不可欠となる。当たり前のことなのに、まだまだ「話題」程度にしか耳にしない日本。誰かがルールを作ってくれると受け身になるのではなく、完全に自分事として向き合わなければならない時代が来てしまったことを実感した。

社会科　北宮枝里子

▶資料：ポスター

※このポスターは生成AI(Stable Diffusion Online)で作成しました。
(キーワード：AI communication human-spirit)

【第 6 回 AI 倫理会議 内閣府訪問 座談会の内容】
日時：2023 年 9 月 22 日（金）16：15～17：15
場所：内閣府
参加者：清泉女学院高校、麗澤高校　　東、木村、外山、前田、山本
内閣府　科学技術・イノベーション推進事務局
（重要課題（社会システム基盤）担当）
博士（工学）吉澤達也 氏　上席科学技術政策フェロー
博士（理学）今井 弘二 氏

＊今回、吉澤様と今井様にお答えいただいた内容は、あくまでもお二人のご意見であり、内閣府の公式な発言ではないことをご了承ください。

Q. AI の進化はめざましく、それに対する理解を深めることが大事だと思いますが、教育現場に AI を取り入れることについてはどう思いますか？
A. AI 自体を知るための教育は必要だと考えます。また、AI を教育に取り入れることも、AI の利点や欠点を学ぶことができるため大切であると思います。しかし、指導者がすぐに教えられるというわけではありません。入試や試験などの問題作成に使用することについては、AI が出してきた情報が真実かどうかを調べるなど、使うときには非常に注意が必要です。それぞれの使用者が高い倫理観を持ち、AI リテラシーを上げていくことが重要です。

Q. 現在は、AI の使用について大学や学校ごとの判断に任されていますが、それでいいのでしょうか？
A. 例えば文部科学省は生成 AI の利用に関する暫定的なガイドラインを示しています。現状では、それ以上に学校において使用を規制することはしておりませんが、状況に応じて規制などの処置をとることも考えられます。授業で AI を取り入れることについては、個人的には賛成です。大人になって初めて AI に触れて大きな失敗をするより、若いうちにどんどん触れて、AI ができること/できないことを学んで欲しいと思います。課題のレポートを AI で作成すると、それっぽいレポートがすぐにできあがるでしょうが、その後ですべての根拠をチェックしたり、必要に応じて添削もしたりしなければならないと思います。しかし、そのチェックを経たレポートは AI を使わずに自分自身だけで作成するよりも完成度は高いでしょうし、社会においては短時間で完成度の高い成果物が期待されます。だからこそ、AI の良い使い方などを守られた学校という環境において早い段階で学んで社会に出た方がいいと思います。

Q. 最近は様々な授業でインターネットを多用しています。今後、例えば「情報」の指導要

領に AI を使用するような内容が入る予定はありますか？

A. 来年度の指導要領にすぐに盛り込まれるということはないであろうが、将来的には考えられます。

Q. ChatGPT は海外で開発されたものであり、日本はそれに依存している状態です。日本でもこのような大型言語モデルを開発する計画や予定はありますか？

A. 例えば国の研究機関である情報通信研究機構（NICT；エヌ・アイ・シー・ティ）は日本語に特化した大規模言語モデルを試作しており、今後は民間企業、国研、大学などと共同研究などを通して更に日本語の大規模言語モデルの研究開発や利活用に取り組むとしています。

Q. 世界では AI の開発や使用について法整備を進めているところもありますが、AI の進化が早すぎるため、それに対応しようとすると法律が抽象的なものになってしまいます。この点についてどう考えていますか？

A. まったくその通りで、非常に難しい問題です。例えば、EU は法整備を進めていますが、過度な規制は AI によるイノベーションを阻害する可能性もあります。それを考えると、具体的な規制と抽象的な緩和のバランスが重要です。

Q. 今井さんや吉澤さんが仕事で AI を使用することはありますか？

A.その正確さなどの確認や興味で試してみることはあります。現在の業務を進めるうえで主として使うということはありません。

Q. AI の台頭によって仕事が奪われつつありますが、ネットでは AI でアニメを作成したりするなどの投稿を見かけます。将来的に、AI だけで作られる映画やアニメーションなどが登場する可能性はありますか？

A. AI だけで作られる映画やアニメーションなどが登場する可能性はあり得ます。AI に仕事が奪われるという話もありますが、いつの時代も新しい技術によって無くなる仕事があり、一方で新たに多くの仕事も生まれました。現状においては、AI は何かを学習して生成し、その生成物にも限りがあります。

Q. ChatGPT が出てきたことで、内閣府の仕事に影響はありましたか？

A. ChatGPT をはじめとする生成 AI は、大幅な生産性の向上などの利点をもたらすと考えられていますが、セキュリティやプライバシーなどのさまざまな課題や懸念が世界的な不安定化要因としても捉えられるようになりました。そのため、AI によるイノベーションの創出とともにガバナンスなどに関して国内の関係省庁にとどまらず各国ともさまざまな議論や調整をはかるようになりました。

Q．AI の進化に驚きはありましたか？

A．大規模言語モデルは突如として現れたというわけではないので、予想していた範囲ではありますが、目の当たりにすると驚いた部分もあります。今は生成 AI の登場に衝撃が広がっていますが、一過性である程度落ち着くと考えています。

◂報告書を提出する様子

▵座談会の最後に記念撮影をしました。

【注釈】

1.総務省　EUのAI規制法案の概要

2.生徒と教師によるChatGPTの利用をニューヨーク市が禁止

3.富士通　AI倫理外部委員会

2023年7月24日　第1版発行

10月30日　第2版発行

発行者：清泉女学院中学高等学校　AI倫理会議 実行委員会

顧問：小野 浩司　北宮 枝里子

住所：〒247-0074　神奈川県鎌倉市城廻200

Tel：0467-46-3171

Fax：0467-46-3157

Mail：k.ono@seisen-h.ed.jp（小野浩司）